

「残りの者」と「待つこと」

残りの者

「残りの者」は敗残者、敗北という悲惨な現実を身に負う。

イスラエルの家では、千人の兵を出した町に、生き残るのは百人、百人の兵を出した町に、生き残るのは十人。(アモス五・3)

それゆえ、知恵ある者はこの時代に沈黙する。まことに、これは悪い時代だ。(アモス五・13)

主よ、あなたの民をお救いください。イスラエルの残りの者を。(エレミヤ三一・7)

「残りの者」は残された切り株、焼き尽くす火の中でお希望を語る。

なおそこに十分の一が残るが、それも焼き尽くされる。切り倒されたレベインの木、樫の木のように。それでも切り株が残る。その切り株とは聖なる種子である。(イザヤ六・13)

その日には、残りの者が帰って来る。ヤコブの残りの者が、力ある神に。(イザヤ一〇・20～23)

現に今も恵みによって選ばれた者が残っています。

(ローマー一・5)

「残りの者」は憐れみの器、神の義を宣べ、主の救いを歌う。

悪を憎み、善を愛せよ。また、町の門で正義を貫け。あるいは万軍の主なる神が、ヨセフの残りの者を憐れんでくださることもあるう。(アモス五・15)

「残りの者」は小さな群れ、世にあっては常に少数者たるをまぬかれない。

たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであつても、残りの者が救われる。(ローマ九・27)
招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。(ルカ二二・14)

命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。(マタイ七・14)

小さな群よ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。(ルカ一二・32)

なんじは戦いに勝つは善事なりというを聞いた。我は言う、負けるもまた善事なりと。われらは戦いに勝つと同じ精神をもって負けるのである。(ホイットマン―内村鑑三による)

待つこと

わたしは主を待ち望む。

主は御顔をヤコブの家に隠しておられるがなおわたしは、彼に望みをかける。(イザヤ八・17)

この世にあつては、

待つことはつらく、不幸なことです。

しかし、霊の世界にあつては、

待つことは尊く、大きな恵みです。

人は、目先きのことのみにとらわれ、

神は、長い目でことをなされるからです。

それゆえ待つことは、

神の、その民に対する特別な導きであり、

主の、その弟子に対する愛の訓練なのです。

待つことによつて、

わたしたちは、じつと耐え忍ぶことを学び、

ものごとの真相を見きわめる洞察を養われます。

待つことによつて、

わたしたちは、いよいよ謙遜にさせられて、

他に対し深く同情することができるようになります。

待つことによつて、

わたしたちは、静かに信頼する心を強められ、揺ら

ぐことのない希望にしっかりと立たしめられます。

ハバクク二・3、4)

待つこと、それは信仰です。

神は、

わが魂はもだしてただ神をまつ。わが救は神から来る。わが魂はもだしてただ神をまつ。わが望みは神から来るからである。(詩六二・1、5、五五年改訳)

わたしたちは切に待ち望みます。

信仰をお喜びになるのです。

主の来り給う時と、

さかんなり、千万の人々、神の命のまにまにはせかけり、

神が天地を完成し給うその時を。

わたしたちは切に待ち望みます。

神自ら、人の目の涙を全くぬぐいとって下さる時(黙二一・4)と、

喜ばしき小羊の婚宴の時(黙一九・5)を。

陸(くが)をこえ、洋(うみ)をわたりて、
休む間もなく急ぎゆく、

そして、その日の必ず来ることを信じます。

されど、たたずみて待つ者もまた、神に仕える。
(ミルトン―内村鑑三による)

もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。神に従う人は信仰によって生きる。(ヘブライ一〇・37、

(所載) 『みぎわ』 58 浜松聖書集会

二〇一八年十月